

琉球人が享受した大和芸能の研究

—家譜資料における芸能関係記事を手がかりとして—

石橋佐紀子(沖縄県立芸術大学大学院)

本論文は、琉球人が享受した大和芸能の実態を、主に家譜資料における芸能関係記事から明らかにすることを目的とする。従来、組踊と大和芸能の関係性は多く指摘されてきたが、琉球人がそれらを具体的に知る機会については十分に検討されてこなかった。そこで本論文では、近世琉球の士族たちの公的活動記録である家譜資料を用い、琉球人が享受した大和芸能について調査・研究を行った。

第一章では、組踊と大和芸能の比較研究史および近世琉球における大和芸能享受の研究史を整理し、先行研究の成果と課題を示した。それを踏まえた上で、家譜資料を網羅的に収集し編年的に分析する本研究の方法を提示した。

第二章では、江戸立・薩摩上国・琉球国内の三種類に分けて家譜の記事を整理し、享受された芸能の内容・時期・場所を年表化して分析した。その結果、享受芸能には一定の傾向が認められ、時代によって変化していることが明らかとなった。また、その変化の要因として、芸能の流行、島津家の私的事情、薩摩藩の財政状況といった複数の要素が関与していることを指摘した。

第三章では、芸能鑑賞の「場」に着目し、上演場所や空間の性格、同席者などを検討した。その結果、薩摩側が場の性質や状況に応じて提示する芸能を選別していた実態が明らかとなった。

第四章では薩摩側の資料を用いて、琉球人が享受した具体的な大和芸能を考察した。その結果、能・狂言については能楽百番のような基本的な演目であれば容易に見聞きすることができた環境であったこと、歌舞伎や浄瑠璃も一定程度享受の機会があったと考えられること、さらに謡本や版本から芸能文学を享受できたことを指摘した。

第五章では、本論文の成果と課題を述べた。本論文の成果は、家譜資料の網羅的収集と編年整理によって享受芸能の実態と変遷・要因を明らかにしたこと、薩摩側の資料を用いて考察したことなどが挙げられる。一方で、調査を行なった資料が限定的という課題が残されており、今後の研究の深化が求められる。